



1

町と歴史シリーズ

記録映画

東京

大江戸の春

■文部省選定 ■芸術祭優秀賞
監修／西山松之助

16ミリ価格／200,000円
カラー28分

企画・製作

講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21
TEL (945)1111(代)

英映画社

〒104 東京都中央区八重洲2-6-13
TEL (281)3414-5・4680

協力
国立劇場
東京都教育委員会
東京都公文書館
津山市郷土館
成田山資料館
出光美術館
三越資料館
早稲田大学演劇博物館
渡辺木版美術館
林恵子

スタッフ
企画 野間省一 効果 小森護雄
製作 高橋銀三郎 録音 甲藤 勇
脚本 藤原智子 演出助手 船津 一
演出 山添 哲 撮影助手 小林 治
撮影 江連高元 製作担当 宮下英一
照明 伴野 功 音楽 内海穂高
音楽 関宮芳生 現像 東洋現像所
解説 城 達也

製作意図

町には町の歴史がある。その町で生きてきた数多くの人々の生活、風習・行事・文化、そういったものが長い年月の間に伝統となって現在の都市を形作り、その都市の核ともいえるものになって生き続けている。この映画は、大江戸の持っていたダイナミックな活力の源泉を探るとともに、江戸の歴史が今日の首都東京にどのように生き、どう係わりあっているかを考える「町と歴史シリーズ」第一作である。

解説

「武都」としての町づくり 江戸時代の後期、文政年間に町名主又太郎が家の由緒を書いて幕府に提出した書類によると、又太郎の祖先は家康の江戸入国以来、百年足らずの間に八回も引越をさせられていたことが判る。これは当時の江戸の町が、「武都」として急速に膨張発展し、庶民の生活に甚大な影響をおよぼしたことを物語っている。江戸の町は全国大名とその家臣による参勤交代や、さまざまな職業の人々が集まってきて、元禄の頃には、武士50万、町人50万の人口を持つ大都市になっていた。

江戸根生いの商人 当時、江戸に住んでいる人々は生活物資の大半を上方に求めた。食料品・酒、衣料や薬品、菜種油などあらゆる商品は上方から江戸へ「下りもの」として送られてきた。産業の発展途上にあった江戸やその近隣で生産される商品は「下らぬもの」、つまり上等でないものとして低く評価されていたのである。こうして江戸へ次々と進出した上方の豪商たちは、大きな利益を上げた。やがて大消費都市となった江戸にも、ようやく上方の商人たちと肩を並べられる、江戸生まれの商人が台頭してきた。

助六と吉原 江戸歌舞伎で名高い「助六」は、生粋の江戸っ子町人、札差がモデルとされている。

その助六の舞台になった吉原は、江戸時代の中頃まで大名や豪商たちの社交場であったが、次第に武士階級に代って経済力を身に付け、余裕のできた町人たちの憩いの場になり、歌舞伎と並んで江戸文化の源泉となった。

浮世絵は、当時の人々に遊里や歌舞伎など、憧れの世界を広く伝える情報媒体であり、格好の江戸土産として人々に喜ばれた。後世、その浮世絵が芸術品として高く評価されるようになったのは、すでに江戸時代の庶民文化が洗練され、成熟していたことを物語っている。

今日に伝えられている伝統的な江戸文化——話芸・音曲・歌舞伎・美術・工芸・染色などは、文化文政期(1804~1830)に花開いたものであった。

江戸っ子気質 たび重なる大火から、いつも不死鳥のように甦り、諸国より集まる人々をいつでも気前良く受け入れてきた大江戸。

執着心が少く、好奇心が強く、意地っ張りでも新しもの好きの江戸っ子。

大江戸三百年の長い封建時代ではあったが、江戸に生まれた人々も、新しく移り住んだ人々も、もしかすると現代人が想像するよりはもっと自由に、そして気楽に生きて、粋でいなせな江戸独自の生活文化を作り上げてきたのではなかろうか。

やがて江戸は明治維新を迎え、名を東京と改め近代日本の首都として歩み始める。しかし、名前や形が変っても、江戸という町の性格や、江戸っ子の気質は、今も東京に住む人々の心の中に脈々と流れている。(29分)



▲助六は、生粋の江戸っ子町人であった。



▲いまも、木場で行われる「角乗り」。



▲江戸っ子のエネルギーが爆発する三社祭。